

アルツハイマー型認知症 (ATD) の発症時期別における遂行機能障害の検討

杉浦 円香

<目的>

アルツハイマー型認知症 (ATD) は、早期から記憶障害とともに遂行機能障害がみられる。遂行機能とは、日常生活において目的を持った一連の活動を有効に成し遂げるために必要な機能である (Lezak, 1982)。遂行機能の評価について、日常生活の状態をとらえていないとの問題点が挙げられている (鹿島, 2003)。また、臨床上高齢のうつ病者は認知症と類似した症状を呈することから、ATDの診断は注意が必要である。現在では Mini-Mental State Examination (MMSE) に加えて時計描画検査などの心理検査を行うことが有用であるともいわれているが、決め手となるものではない。さらにはATDは発症年齢の違いが症状の進行へも影響を及ぼすことから、発症時期を分けて検討する必要がある。よって本研究はATDの発症時期を分けて検討し、さらに鑑別が難しいとされる高齢の抑うつ傾向者とも比較検討を行う。

<方法>

ATD患者15名 (前期ATD患者 [75歳未満発症]: 6名, 後期ATD患者 [75歳以降発症]: 9名, Geriatric Depression Scale (GDS) により抑うつ傾向がみられた方4名を対象に実施させていただいた。なお、健常高齢者は1名のみであったため、分析対象からは除外した。使用検査は、MMSE, 老年用うつ病尺度 (GDS), 前頭葉機能検査 (FAB), そして遂行機能障害症候群の行動評価 (BADS) を用いた。

<結果>

前期ATD患者と後期ATD患者の遂行機能を比較した結果、FABのみに差がみとめられ、前期ATD患者の方が悪かった ($p < .01$)。また前期ATD患者と抑うつ傾向者との比較においてもATD患者の遂行機能は有意に悪く、FABに加えて

BADSにも差がみとめられた。BADSの下位項目中では「動物園地図検査」($p < .01$)、「規則変換カード検査」「鍵探し検査」「時間判断検査」($p < .05$)において差がみとめられ、特に「動物園地図」では要求水準の異なるバージョン1と2からなり、ATD患者は要求水準の高低にかかわらず成績が悪かった。

<考察>

遂行機能は加齢による影響を受けるが (Bryan, 2002), ATDはそれとは異なり一般的な加齢とは同じではないと考えられる。またATD発症が早い方が遂行機能の問題もみられることから、今後発症時期の早いATD患者への介入として遂行機能に焦点を当てた介入が重要であると推察される。さらに、抑うつ傾向者との比較から、FABによって全体像をとらえ、加えてBADS下位項目の「動物園地図検査」を行うことにより、ATD患者と高齢の抑うつ傾向者との鑑別に有用であることが示唆される。

<主な文献>

- Brian, A., Theresa, M., Schmeidler, J., Richard, C., & Kenneth, L. (1994). Clinical Symptoms Associated With Age at Onset in Alzheimer's Disease. *The American Journal of Psychiatry*, 151, 1646-1649.
- Lezak, D. (1982). The problem of assessing executive functions. *International Journal of Psychology*, 17, 281-297.
- 鹿島晴雄 (2003). *BADS 遂行機能障害症候群の行動評価* 日本版, 新興医学出版社.